

ICT国際競争力会議 第1回議事要旨

1 日時 平成19年6月18日(月) 17:00:~18:00

2 場所 総務省8階第1特別会議室

3 出席者 村上議長代理、伊丹構成員、岡構成員、岡本構成員、小野寺構成員、黒川構成員、小林構成員、孫構成員、中鉢構成員、橋本構成員、広瀬構成員、古川構成員、矢野構成員、和田構成員
菅総務大臣(議長)、田村副大臣、谷口政務官、有富総務審議官、清水総務審議官、鈴木情報通信政策局長、森総合通信基盤局長、寺崎政策統括官、阪本総合政策課長、佐藤情報通信政策課長

4 議事要旨

- (1) 冒頭、菅総務大臣から開催にあたっての挨拶が行われた。
 - (2) 議長である総務大臣から齊藤構成員及び村上構成員を議長代理に指名した。
 - (3) 事務局から資料の説明が行われた。
 - (4) 「開催要綱(案)」(資料1)が了承された。また、会合は非公開とし、原則として、使用した資料及び議事要旨を総務省のホームページに掲載することについて了承された。
 - (5) 「分科会の設置(案)」(資料2)及び「ユビキタス」特区の創設に向けて(案)」(資料3)が了承された。
 - (6) 出席の構成員から意見発表が行われた。また、欠席の構成員から事前に提出された意見については、村上議長代理が紹介した。各構成員からの主な意見は以下のとおり。
- 次の3つの活動を有機的な連携のもとに進めていくことが重要。まず、海外へのビジネス活動。具体的には、キャリアとベンダが一体となって、日本が優位性を持つ光、映像、センサー等の技術を取り入れたシステムやサービスを海外に展開していくということ。次に、国際標準化活動。具体的にはITU等において、国の内外のベンダや海外のキャリアと連携しながら、戦略的に標準化活動を展開していくということ。最後に、技術の普及・連携活動。具体的には、海外からの技術研修生の受入れ、海外でのセミナーやフォーラムの開催、海外の研究機関との共同研究等を継続的に進めていくこと。
- 重点3分野というとりあげ方は、大変適切な選択である。日本のマーケットは非常に先進的なマーケットになっており、そこで新しいサービス、新しい技術が展開されている。これを役立て、国際展開していくことは非常に妥当。メーカーの立場でも、これを強力に推進していきたい。また、メーカーと事業者(通信事業者や放送事業者)との一体的な協力関係が、海外展開のためには非常に重要。海外の事業者は、国内に閉じずに国際展開も図っている事業者がいるということも一部視野に入れながら考えていただく必要がある。さらに、標準化については、従来、総務省は、デジュール中心の活動であったが、デファクト的なものへの対応も、バランスよく考えていただきたい。
- 日本の「強み」や「売り」について、ある程度議論した上で、集中投資していくということも必要。例えば、トレーサビリティのようなアプリケーションを含めたプロジェクトを実施するなどが考えられる。また、「ICT国際競争力強化プログラム」の実行にあたっては、産・官・学の横断的な連携が非常に重要。この基本プログラムの「ICT国際競争力会議の設置」でも記載されているように、IT戦略本部、経済財政諮問会議、知的財産戦略本部等との連携に加えて、関係省庁との連携もお願いしたい。ICTによる生産性の向上については、コードが絡んで、非常に複雑な連携が必要であると思うが、これこそ、まさに成し遂げて競争力をつけるべきものと考えているので、産業界の生産性向上と競争力の強化を支援していただきたい。ベンダとしてもきちんと取り組んでいきたい。最後に、これは将来課題かもしれないが、ICTの国際競争力の視点で、モノを安くつくりとか、強いモノをつくりということだけではなく、国家的課題である少子化対策や省エネ・環境問題対策などについて、議論を深

めていく必要がある。

- テレビ番組をはじめとする日本の動画文化を、どのように外に出していくか、競争力をどのように増強するかという点について、番組や動画の中身は、日本国内で評価されるものは、海外でも評価されるので、現状でもあまり問題はないと思う。問題は2つある。1つは、権利処理が非常に難しくて出しにくいという点。「権利者」ももうかる、番組をつかったテレビ局等「つくり手」ももうかる。そのことが日本の動画文化の活力の源になる、ということをおねらうべきであり、決して利害が錯綜するというのではないと思う。もう1つは、日本の場合、宣伝の場を国策的につくってこなかったという点。北京、上海、その他の都市でも、日本人の多いところでは、日本人向けに、既にいろいろな番組が放送されている。現地の言葉に直して、1～2年、無料で放送して、それが日本の動画文化の大きな宣伝の場になることを目指してはどうか。もう1点、つけ加えると、日本のホテルで、日本のBSハイビジョンや地上波のハイビジョンを見た外国人は、デジタルのHDの鮮明さや迫力に驚く。つまり、ヨーロッパやアメリカで行われているデジタル放送は、必ずしも帯域が大きいわけではなく、画像が鮮明でもない。ここで初めてハイビジョンのすばらしさに気づくという人も多いようである。この点は大事にすべきであり、NHKの技研を中心に放送技術を磨いてきた日本の現状を、ブラジルのプロジェクトのような形で、アジアの各国にも知らせていくべきである。
- コンテンツをいかにして流通させるかという目標がある。コンテンツというものは、押し売りではなくて、相手の欲しがるコンテンツをどうつくり出すかということ。まず、日本国内で、その生産力、構想力、創造力を高めることが肝要である。また、プロダクション側がつくった番組を宣伝する場、見せる場が必要であり、いろいろなチャンネル、メディアを通じて、それを発露する場というものを大事にする必要がある。また、流通も次の段階で重要であり、権利処理の問題の各国間の調和が非常に大事になってくると思う。ハードインフラの点では、日本のISDB-T方式がブラジルで採用されたというのは、大変有用なうれしい話。これを核に、いかにして周辺国にも協調していただくかというプロモートが大事であるので、電波産業界という場を通じて、オールジャパンでどのように工夫するかという検討が必要。ただ単に、技術方式というだけで見るとはなくて、これを通信と放送的な手段が融合・連携した一種のアプリケーションとして売り込んでいく視点も考えていく必要がある。
- 日本がイニシアティブをとれる得意な領域から始めるべき。例えば、ISDB-T方式のグローバル展開や、モバイルコマースとして日本で普及している携帯電話を「かざす文化」をグローバルな戦略の視点の中に入れることではできないのかということでも期待もしている。他にも、日本が得意とするデバイス等が数多くあり、これもメーカーとキャリアとが一緒になって、グローバル展開ができれば良いと思う。一方、世界のICT領域における環境の変化というのはスピードが大変速いので、このような会議体でコンシステンシーを大切にすることも大事だが、場合によっては、朝令暮改というそしりを受けても、フレキシブルに対応することも大切だと思う。
- 日本が最近、最も国際競争力を持った事例の1つとして、ブロードバンド、特にADSLの事例がある。これは、徹底的な市場開放を行って、国内での競争を促すということが官民を挙げてなされた結果、激しい国内での競争が行われ、日本は世界一安く、世界一速いブロードバンドが提供されるようになった。国際競争力を持つためには、国内での競争を一層促すための開放政策・競争政策をとり、イコールフットィングの環境を整えることが一番近道。ブロードバンドの市場は、光ファイバに移ろうとしつつあるが、光ファイバでもADSLと同様に、徹底した競争政策という観点で見ることが1つの重要なポイント。これは無線である携帯電話においても同じ。韓国では、鉄塔の共用や電波利用料の問題等について、事業者間でイコールフットィングを図っているのだから、日本でも、他国の事例を研究すると良いと思う。また、日本はブロードバンドで国際競争力を持ったが、インフラは整ったけれど、コンテンツが流せない。コンテンツが無いのではなくて、せっかくあるコンテンツが、放送の場

合では流せるけれど、インターネットは放送ではないという扱いがされているがゆえに、流せないというハードルがある。IP マルチキャストについては、インターネットも放送と同様にするという流れがあるが、これを加速し、IP マルチキャストだけではなくビデオ・オン・デマンドでも同様にならないとインターネットで自由にコンテンツを使うということにならないと思う。最後に、ADSL も光も来ないというブロードバンド過疎地が、日本全国にまだ多く残っているので、これに対する対策を講じて国民全体を底上げすることが国際競争力を生む源泉にもなると思う。

- 過去の海外のいろいろなケースで、必ずしも日本のこの分野が強くなかったために非常に悔しい経験をしたことがあるので、ぜひオールジャパンに近い形で、これから、いろいろな具体的な施策を打っていくべき。そのような観点で、2つ意見を述べる。まず1つ目は、標準化、デファクトの重要性を、再認識すべき。2つ目は、いろいろな国の事情を考えながらやるべき。例えば、環境問題に対するICTの活用、食の安全・安心という観点でトレーサビリティやサプライチェーンマネジメントの構築が必要な国は多い。各国でのパートナーと一緒にやっていくなど、いろいろなアレンジが必要だと思うが、日本の技術、日本の考え方、日本の今までの見識、これは十分に活用していただき、その結果として、その国が一層発展していくというようなWin-Winの関係ができると思う。
- 技術が先端でも、それが活用しやすくなければだめであり、また、当然、コスト、価格も合わなければいけない。その意味では、このような技術を開発するとき、一体どこのレベルにマーケットを設定して考えていくのかということが重要だと思う。また、技術をいろいろ使いこなそうとしたときに、例えば教育の分野に使うとすれば、各国固有の制約をどういうふうにつまみ取って、同じレベルに考えていくのかという、技術が使われる環境を世界でベンチマークして、それを意識したものにしていかないと、結局、技術はできたけれども、使われないということになってしまうと思う。
- 国際競争力とともに、「ICT 国際競争力懇談会」の「最終とりまとめ」に書かれている「国際共生力」にどのように取り組んでいくかということが重要だと思う。相手国や地域のマーケットをよく見ることが重要であり、「技術を進めればそれで売れるということではない」ということをよく認識する必要があると思う。また、重点3分野を定めたことは良いことだが、一方で、「ICT 国際競争力強化プログラム」では、基本プログラムや個別プログラムで多数の施策があるので、重点3分野とこれらの基本プログラムや個別プログラムのマトリックスをつくり、どこから攻めていくのか、どこを重点項目として実施するのかについて、優先順位をつけると良いと思う。「ICT 国際競争力強化プログラム」の全てを実施するのは困難だと思うので、選択と集中を図った方が良い。さらに、基本プログラムに掲げられている「ユビキタス特区」については、単に研究・開発のための利用ではなく、実際にグローバルスタンダードの形成に向けた日本の市場を、世界最先端技術のテストベッド的なものとして有効活用した方が良いと思う。つまり、単なる特区という位置づけだけではなく、海外にも展開を図るために、実態としてこのようなものがあるということを示すことが、非常に有効なのではないかと思う。
- 「(アジア、欧州、北米の間での) 情報の流れが、現在、非常に不均衡になっている」ということは、いわば当たり前だと思う。日本には流すべきコンテンツについて、パーツはいろいろとあると思うが、社会には世界ときちんとインターフェースをとっていかうという方向性がないと思う。今、日本はいくつかの国で批判にさらされている。下手をすると、アジアでの地位も失いかねない。アジアだけではなくアメリカへ行っても、いろいろと批判が横溢しているが、日本に帰国すると途端にすべてを忘れるくらいに気持ちの良い社会が待っている。「ICT 国際競争力懇談会」の「最終とりまとめ」にある「ガラパゴス化」というのは、まさにそういうことだと思う。つまり、こちらから発信しなくてはいけないという意識や世界のことを知らなければいけないという切迫した必要性自体がない。例えば、今、パレスチナで起こっていることについて、これまでのテロの事情を一変しかねない大きな

ことであるにもかかわらず、それに関する報道の関心はあまり見られない。さらに、日本ではネット社会での公共性が見られないが、少なくとも英語では、金にならないが世のため人のためというコンテンツが多い。グーグルが検索エンジンに広告を連動させるという事業モデルだけで巨額の富を得た上で世のため人のための情報を公共空間に流しているが、我々ももう少し関心の範囲を、自分以外の、さらにはコミュニティー以外のところへ広げて、世界全体のことに関心を持たない限り、日本はインフラは立派なものが増えても世界の意識とのインターフェースがとれなくなってしまう。国際会議に出ても、日本代表の発言というのは、「自分のところはこうなっています」という説明だけで、あとの大きなプラットフォームづくりのところでは、なかなか議論に参加できていないという状況が続いていくことを心配している。これにはやはり政府の強いオリエンテーションが必要なことだと思う。

- ハードの競争力の強化は、当然、必要だと思うが、コンテンツを日本から発信していくという観点から、具体的な提案をしたい。日本には、かなり良いコンテンツがあるのではないかと考えている。非常に限られた分野であるが、シンガポールにおいて「ジャパン・アワー」という形で、もう既に何年か、日本のコンテンツが流されており、大変な評判を得ている。これをさらにコンテンツそのものを高め、放送していく範囲も広げていくということを考えていきたい。それを実現していくためには、「ICT 国際競争力強化プログラム」にもあるように、良質なコンテンツの制作と、海外におけるジャパン・コンテンツの露出ウインドー（ショーウインドー）、放送枠の確保が大変重要だと考えている。この辺を、官民一体となって取り組む必要があるとも思っているので、この会議を通じて、政策の具体化を進めていくことに協力していきたい。
- 日本の国際競争力が弱いのは、日本全体にある人材や資源の総量が小さいからでも質が悪いからでもなく、さまざまな企業、機関、大学に分散されて配置されてしまっているという産業構造に最大の理由があると思う。したがって、議論を進めていくと、さまざまな分野で、「産業の再編成」とでも表現すべきようなことが起きないと、最終的には、長期的な国際競争力を維持するようなことには、ならないだろう。どこかの企業がなくなる、どこかの分野で新しい企業が生まれる、ということが起きるぐらいの大きな変化がないと、これまで起きてきた 10 年、20 年単位の日本の国際競争力の緩やかな減退という現象に歯止めがかからないのではないかと考える。また、会議の運営については、重点 3 分野は、当然、選ばれてしかるべき重点分野だと思うが、標準化や方式の世界への普及に議論を集中させすぎないように、その先、仮に標準化されたとしても、本当に日本の企業がその標準化された日本発のスタンダードで国際競争力が持てるか、というところまで踏み込んだ議論にぜひいただきたい。標準化の問題が、入り口として非常に重要であるということをお断りするものではなく、その先のほうがより大切なのではないかと考える。次に、この会議のメンバー以外の、もっとさまざまな方たちの意見を聞く機会を設けたほうが良いと思う。現在の産業の秩序を壊そうとしておられる中堅企業やベンチャー企業など、この会議のメンバーとは少し違うタイプの企業の方々から、ご意見をお聞きする機会を十分に設けるべきではないかと考える。
- まず、「ICT 国際競争力強化プログラム」では非常に広範な施策が意欲的に盛り込まれているが、各プログラム・各施策ごとにそれぞれ目標達成時期等も異なってくる。本会議では、各施策同士の関係性も十分考慮しながら、それぞれの達成目標と進捗を、時間軸と共に明確にしていくことが必要である。また、「ICT 国際競争力強化プログラム」における、「ユビキタス特区の創設」や「ジャパン・イニシアティブ・プロジェクト」等の『基本プログラム』の実行は、いわば国際展開の第一歩であり、我が国のコアコンピタンスをより明確にして展開を図っていくことが重要である。したがって、本会議では、諸外国の展開事例もよく調査・研究した上で、構成員の皆様方の幅広い見識を結集していただき、日本として「何で勝つのか」を検討し絞り込んでいくことも重要な役割だと思う。さらに、国を挙げて ICT 分野の国際競争力強化を実現していくためには、総務省をはじめとして、他省庁や、経

済財政諮問会議、規制改革推進本部、知的財産戦略本部等との連携が不可欠である。その観点から、本会議では、政府一丸の取り組みとなるよう、具体的な連携方策等についても十分議論を重ね、取りまとめていく必要があると思う。なお、本会議では今後の我が国 ICT 産業の競争力を左右する戦略について重要な議論が行われることを踏まえると、議事及び会議資料等の公開・非公開等、会議の位置付けについても十分検討する必要があると思う。特に、ICT 国際競争力プログラムに挙げられている「重点分野の基本戦略」、「ICT 知的財産強化戦略」、「ICT パテントマップ」等に関する議論については、丁寧に扱う必要がある。

- 次の3つの視点が重要であると認識している。1つ目は、通信・放送分野の国際標準化に向けた強化プログラムの着実な推進。2つ目は、ISDB-T の海外展開を強力に推進するためにも、先ずは、我が国の完全デジタル化へのスムーズな移行が必要不可欠。イノベティブな挑戦ではあるが、国際競争力強化の観点からも必ず成し遂げなくてはならない国家事業であること。3つ目は、ICT 分野のデジタル化のメリットである周波数の有効利用、再配分と、イノベーションの加速によって、製品、新しいサービスが登場し、新たな需要が創造されること、そして、日本のみならず海外への展開によって、我が国経済、社会の活力が生み出されることへの期待。海外諸国との連携強化を図り、世界各国にとっても「美しい国づくりのためのインフラ整備」というフラグシップのもと、強いリーダーシップを期待したい。
- ICT 国際競争力懇談会での検討により、ICT 産業の現状と課題が整理され、これを踏まえた網羅的なプログラムと重点分野の基本戦略が策定されたので、今後は、これを迅速にかつ効率的に進める必要があると思う。また、次世代 IP ネットワーク、ワイヤレス、デジタル放送については、日本がリーディング・イノベーターとして、研究開発・標準化・事業化を積極的に推進をする必要があり、特に、NGN、第4世代携帯電話、次世代広帯域移動無線アクセスシステムについては、標準化への日本の積極的な関わりが、今後の技術外交戦略上重要である。さらに、産学官がそれぞれの領域を尊重しながら、具体的なテーマごとに有機的に協力関係を保ち、推進することが必要である。